エスプレッソとバニラ

目次

エスプレッソとバニラ　5
信頼　231
甘いバニラに包まれて…　269

エスプレッソとバニラ

1　仕事の鬼

「昼食、一緒に行く？」

朝からひと言も言葉を交わしていなかった久保さんが、急に声をかけてきた。誘ってるっていうんじゃなくて、無視するのも気まずいから一応声をかけたっていう感じ。

今日は私たち以外は出張でいない。だから私は朝から彼とふたりきり。そのせいで背筋に汗をかくほど緊張していた。

久保さんは、ほどよく筋肉のついた体に整った顔立ちの若きホープだ。私より三歳年上なだけなのに、ばりばりと実力を発揮していて、何年後かには省庁に出向し、会社に戻る頃には役職についているのではないだろうか。

ここは、全国に数ケ所の研究所を抱えている会社だ。その東京支社に、私、桐原芽衣は派遣で通っている。社員の人がやっている仕事は、専門的でものすごく難しいけど、私はその書類を整理するだけ。パソコンの技術があれば、誰にでもできる仕事だ。

この部署に配属されて半年。私は……久保さんを好きになっていた。でも、彼はまったく私に興味がない。私に限らず、女性全般に興味がないんじゃないかと思えるほどストイックだ。

仕事に対するシビアな姿勢を見て、彼を冷徹だと評する人も多い。話しかけた女子社員の中には、彼が発するオーラに気圧されて後ずさる子もいるほどだ。

近くにいると、ちょっと怖いと思うのは私も同じ。

だけど……それでも彼が好きだ。彼の仕事に対する厳しい姿勢だって素敵に見える。

真夏にネクタイをきっちり締めて涼やかな顔で仕事する姿も素敵だと思うし、自分に割り振られた仕事以外のことにも、積極的にチャレンジしている姿もかっこいい。

「社員食堂じゃなくて……また、外に行きませんか？」

久保さんと一緒にランチするなら、プチデート気分を味わいたいと思った。

「ああ、いいよ」

相変わらず素っ気ない態度で、彼はそう言った。

久保さんは密かに女子社員から人気があるけど、実際は誰も声をかけない。私だって、隣り合って仕事をしていなければ、声なんか絶対かけられなかったと思う。

彼は自分だけでなく周りにも、同じレベルの仕事を求める。

あまり事務処理の速くない私は、何度も怒られた。作った書類を捨てられたこともある。でも、彼の言うことは正論だし、自分のバカなミスだったから、文句は言えない。

悔しくて、何度となくトイレで泣いた。そんな怖い久保さんだけど、部署に人がいなくなると、時々外でのランチに付き合ってくれる。

いつもの私は、同じ部署の人達と昼食をとる。髪の薄い飛田課長と、小太りの五十嵐さん、細身の小田さんの三人だ。さしておもしろいことがあるわけでもなく、黙々と食事するだけのつまらない時間。だから部署の全員が出払って、久保さんとふたりきりで過ごすのは私の密かな楽しみだ。

男ばかりの部署だから、私には女子社員の友達がほとんどいない。派遣の中途採用で入ったせいもあり、他部署の女性ともなかなか親しくなれなかった。だから仕事場での仲間は、キャラの濃い男性四人だけだ。

「企画書、そろそろできた？」

エレベーターに乗るなり、久保さんは仕事の話をふってきた。せっかくのお昼休みなのに、仕事の話なんかしなくてもいいのに……

私は心の中でため息をつきながら答える。

「ええ、あと一時間くらいでできます」

いつもこうだ。彼は私に仕事の話と、仕事上で関係する人のことしか話してくれない。

「休日はどうしてるの？」とか、「今日は寒いね」とか、あたりさわりのない世間話すらしてこない。恐ろしいほどに、仕事とプライベートをわけているのがわかる。それでも、私は彼の心に入り込みたくて強引に話しかける。

「もうすぐクリスマスですね」

こんな話題を出せば、少しは会話が広がるはずだ。「街がにぎやかだね」でもいいし、「ライトアップされてる木があったよ」でもなんでもいいのに。なのに、彼は興味なさそうな顔をするばかり。

「ああ」

返事も、これだけ。まったく会話が続かない。

「あのー……」

「恋人と過ごすんですか？」そう聞いてみたかった。でも、怒り出すかもしれない、と思って聞けない。

ＩＤカードを通して外に出る。重いドアを押さえて、私が出るまで彼は待っていてくれた。こういうところで、私の心はキュンッとなる。口調はいつも冷たいくせに、時々優しい行動をしてくれるところがツボにはまる。

「で……なに。さっき言いかけたの」

「え？」

ドアのエスコートの件で妄想モードに入っていた私は、自分がさっき久保さんに質問しかけていたのを忘れていた。

「あ、ああ……そうそう、久保さんはクリスマスって恋人と過ごすのかなーとか思ったんですよ」

外に出た開放感で、思わず言ってしまった。言ってから、冷や汗が出た。

「別に、クリスマスに限らず、恋人ならいつでも一緒がいいだろ」

「あ……ああ、そうですよね」

ものすごく意外なことを聞いた気がする。能面のように表情を崩さないくせに、彼の口から出てきた言葉は、ちょっと情熱的だった。その返答から、彼に恋人がいるのかどうかまでは推測できな

かったけれど、やっと聞けた仕事以外の話題に感動した。
これでも、ちょっと強引にアプローチしているつもりだけど、彼が私の気持ちに気づいている気配はない。久保さんが鈍くなければ、自分が好意を持たれていることに気づいてもいいはずなのにな。
空気を送っている。オーラを発している。雰囲気で、相手が自分に好意があるって察知する力。これ……恋愛には大切だと思うんだけどな。久保さんにだって、少しはあるでしょ？
なのに、さっぱり反応がない。相手にされていない。
心の中でひとりごとを言っているうちに、目的のピザ屋さんに到着。
「嫌いなもの、なかったよね？」
「はい。イタリアンなら、とくに苦手なものはありません」
一緒に食事ができるっていうだけで私は浮かれているのに、彼はいたって冷静にピザを注文している。
数分後、イタリアンピザが二枚運ばれてきた。ふたりで黙々とそれを一枚ずつ平らげる。
この間、会話なし。ピザが運ばれるまでの間は、やっぱり仕事の話しかしてくれなかった。
クリスマスの話を、もう少し続けたかったのに。残念ながら食事は終わってしまい、私達はまたオフィスに戻ることになる。
外食のときは、久保さんが無言で支払いをすませてくれる。何度もそのお金を返そうとしたけど、受けとってくれなかった。いつも外に食べに行こうって誘うのは私なのに……
私の少し前を歩く、無言の久保さん。その広い肩幅に、またもやトキメく。

彼は自分の足下に転がっていた、まだ火のついているタバコを踏みつけた。
「ポイ捨てなんてマナー悪いですよね。歩きタバコとかも最悪ですよね」
彼の行動に同調するつもりで言ったのに……
「他人の恋人探るのも、マナー違反じゃないの？」
冷たい視線が注がれる。
「……」
なにも言えない。クリスマスの話題を出したことが、そんなに気に食わなかったのだろうか。ここまで言われるほど、失礼なことを言ったんだろうか。
悲しさが押し寄せる。好きな人から、こんな風に冷たくされるのは……つらい。
私がうつむいてなにも言えなくなっていると、久保さんはそれを無視してまた歩き始めた。この人には、自分に好意を寄せる女の子に、少しでも優しくしようっていう気遣いはないのかな。
「企画書、早めに出してね」
それだけ言って、オフィスの一階にあるコーヒーショップに向かってしまった。
彼はコーヒーが好きで、しょっちゅうエスプレッソを飲んでいる。あんな苦くて濃いコーヒー、どこがおいしいのかわからない。
言われた通り、午後の仕事が始まってすぐ、仕上げた企画書を提出した。
「……脱字がある」

即行で用紙を返される。
「え、どこですか？」
「自分で探して」
「……はい」
冷たい言葉に心を砕かれるが、私は必死で脱字を探した。
企画書とにらめっこして、やっと一ヶ所発見！　嬉しくなって「あった！」と、思わず口にしていた。
「三ヶ所あるから」
意気揚々と修正にとりかかっていると、冷たくそう言い放たれた。
そうですか……三ヶ所ですか。瞬時に、よく見つけましたね。先に教えてくれてもいいんじゃないですか？
そう思いながら、私はムキになって間違いを探す。
ようやく三ヶ所見つけて、用紙を印刷し直した。
「紙が無駄になるから、ちゃんと確認してから印刷して」
ようやく合格をもらった企画書を手に、久保さんはそう言った。
「はい……すみません」
企画書が完成してホッとした瞬間、電話が鳴った。
要件は、研究へのクレームだった。
「担当者に代わります」

私では相手にならなくて、電話を久保さんにまわす。
「はい、お電話代わりました」
冷静な彼の声。電話の向こうでは、なにやら随分まくしたてているようだ。ひと通り相手の言い分を聞いて、それから彼はこう言った。
「その点に関しましては、上司がそちら様に直接お詫びにうかがったと聞いております。苦しいお立場と拝察いたしますが、こちらも命をかけて研究しておりますので……これ以上はご容赦いただけますと幸いです」
相手は無言になったらしく、彼はそのまま受話器を置いた。
こんなふうに、クレームが入ることは珍しくない。ここで扱っている研究対象が、ちょっと特殊なもののせいなのだけれど、下手な対応をしたら裁判沙汰になりかねない。
「命をかけて……ってのは大げさかもしれないけど、それぐらい真剣にとり組んでるんだ」
そう言って、彼は席を立った。またコーヒーでも買いに行ったのかもしれない。私は、彼の仕事への情熱を感じて、ひとりでまた感動していた。
やっぱりかっこいい。どう見ても……かっこいい。
もし恋人がいると言われても、仕事場では私が独り占めしたい。ひとりで熱くなりながら、また別の仕事にとりかかった。
次の日の朝、会社の入り口で久保さんにバッタリ会った。いつもは早く出勤する彼が、私と同じ

時間に来るのは珍しい。朝から彼に会えて少し嬉しくなった。
「おはよう」
「おはようございます」
エレベーターの中では、やっぱり無言だった。クリスマスの一件できついことを言われたから、なんだか声をかけづらい。
フロアに入ると、今日も三人は出張で、ふたりきりだった。
久保さんの様子をこっそり盗み見る。相変わらず自分の仕事に没頭している。
無言の時間が、今日は重く感じる。ようやくランチタイム。この日のランチは、社員食堂でとることにした。
そうそう外食に誘うのも悪いし、今日はそこまでのパワーが湧いてこない。
どちらともなく立ち上がって、ふたりそろって歩き出した。私がまったくしゃべらないのが気になったのか、珍しく久保さんから私に声をかけてきた。
「課長、出張いつまでだっけ」
「さあ……。課長はだいたいスケジュール書かないで出かけるから、私は知らないです」
「あ、そう」
まったく会話が弾まない。素っ気なく答えた私も悪いんだけど。
そうこうしている間に、食堂に着いた。
私の食べているメニューは、きつねうどん。油揚げがやたら薄くて、ボリュームとしては「素うどん」と変わらない。
思えば、好きな人を前にして、汁ものを注文する自分は女としてどうなのか……。まあ、そういうのを気にする人でもなさそうだから、私はかまわずに食べる。
久保さんは牛丼と味噌汁のセットにしたようだ。私達は黙って昼食を食べた。
食事が終わり、また例のごとく彼はコーヒーショップに立ち寄ると言ったから、私はそのままフロアに戻った。
二十階のフロアから景色を眺める。薄くもやがかかっていて、今日は東京タワーが見えない。快晴だと富士山だって見えるほど高いビルなのに残念。
ボーッと窓の外を見ていると、ふっとうしろに気配を感じた。振り返ると、久保さんがコーヒーカップを私に差し出している。
「カフェラテ、飲める？」
どうやら私にごちそうしてくれるらしい。
「あ、ありがとうございます。カフェラテ、好きです」
軽く頭を下げて受けとった。久保さんは自分のエスプレッソを手に、机に戻ってパソコンをいじりだした。
「……」
どうして、今日に限ってコーヒーをごちそうしてくれたんだろう。よくわからないけど、なんだか嬉しい。私は単純だから、こんなことですぐに気持ちが上向く。

「久保さんは、いつもエスプレッソですよね？」
これなら怒られないだろうと思い、言葉を選んで話した。パソコンに向かっていた手がぴたりとまって、私を見る。またなにか言われる？
「単に好きだから……」
それだけぼそっと言って、またパソコンに向き直った。
彼なりに、きちんと答えたつもりなんだろう。回答としては間違ってないと思う。ただ、もうちょっと話が弾む返答をして欲しい。それを望むのは無茶なことなんだろうか。

始業のチャイムが鳴り、午後の仕事にとりかかる。
始めたはいいけど、この日の私は集中力に欠けていた。カフェラテをもらったことに動揺して、ミスを連発した。たったあれだけのことなのに、好きな人から少し優しくされただけなのに、やっぱり戸惑う。「どういう気持ちで？」ってことばかり考えてしまう。
「これもダメ、これも、これも……全部ダメだ。なんだよ、どれもまともにできてないじゃない」
怒られた。
「ごめんなさい」
「桐原さんさ……」
フッとため息混じりに私の名前を呼んだ。
「はい……」

「資料を作ればミスが多いし、いつもオタオタ迷ってばかりで、性格も優柔不断だよね。そんな頼りなくて、この先ちゃんと生きていけるの？」
いつもは平謝りの私も、彼のこの言葉を聞いて動作をとめる。
優柔不断？　私の将来まで、否定？　性格や未来まで非難するなんてあんまりだ。
「……久保さんにそこまで言われる覚えないです」
「え？」
私が口答えしたからか、彼は驚いていた。冷たい表情。私のことなんか、どうとも思ってないっていう目。
「仕事のミスは、私の責任だから謝ります。だからって、性格や見えてもいない将来まで否定するなんて……それこそマナー違反ですよ」
涙をこらえてそこまで言って、大きく一度深呼吸する。そして、彼が握っているミスだらけの書類をとり返した。
「全部やり直します。一時間以内に再提出しますから」
久保さんは、それ以上なにも言わず、また自分の仕事に戻った。悔しくて、いつもの倍以上のスピードで仕事を進め、宣言通り一時間以内に再び提出した。
「できました」
私が差し出した書類をペラペラと眺めて、久保さんはそれをクリップでとめた。
「次、この手書き書類を全部ワードに打ち込んで」

私のがんばりにはなんの言葉もかけてくれず、次の仕事の指示を出された。好きな人だったけど……ムカついた。この人はどこまでも仕事にシビアだ。私にもそれを要求している。
カフェラテをくれたのは、ただの気まぐれだったんだろう。不毛な恋愛は……もうやめよう。

この日を境に、彼に積極的に話しかけるのをやめた。
たまにランチが一緒になっても、もう外食しようなんて言い出さない。
そう割り切ったら、案外気持ちが楽になった。
この人に好かれようなんて、思った私がバカだった。血が通ってないんだよ……仕事人間。
確かに、仕事はばりばりこなせるし、すごいと思う。でも、人間としてどうなの。彼の冷たい言葉で、私の胸はナイフで切り刻まれたようにズタズタだ。
仕事はがんばることができる。でも、性格はそう簡単には直らない。私を生んでくれた両親までバカにされたような気がして、さらに傷ついた。
私をかわいがってくれた、おばあちゃんの顔が浮かぶ。
「芽衣は、ゆっくり生きるタイプなのね。おっとりした芽衣が好きだわ……」
優しく頭を撫(な)でてくれたおばあちゃん。ごめん、せっかく褒(ほ)めてくれたのに、仕事場では否定されちゃった。
直したいけど……がんばってやっているけど……私にはこれが限界。器用で有能な人から見たら、とんでもなくバカに見えるに違いない。久保さんの目には、私っていう人間が、そんなふうに映っているのだろう。
悲しい。精一杯やっていた。怒鳴られても、めげずにがんばってやり直した。なのに、ただの一度も、ねぎらってもらったことはない。
気を利かせてやったつもりの仕事も「余計なことするな」と言われて空まわり。どんどん自信がなくなっていく。
私は、なんであの人が好きなんだっけ。その理由さえもうわからない。
別の恋を探そう。そう思い、クリスマスソングが流れる街を、抜け殻(がら)のように毎日往復した。
恋人なんかいなくても、クリスマスは過ぎていく。
久保さんの誕生日が二十三日にあることも、もうどうでもいい。「おめでとうございます」ぐらいは言おうと思っていたけど、それもやめた。

しんしんと染みるような寒さ。いよいよ雪まで降りそうな空模様だった。
外は年末の浮かれた雰囲気。
こういう華やかなシーズンは嫌いじゃなかったけれど、今年のクリスマスはさっさと過ぎてくれないかな、と思っていた。
「じゃ、お先に」
私と久保さんを残して職員ふたりが帰っていった。
課長は今日も出張。私は、久保さんに頼まれていた大量の原稿のチェックに追われて残業してい

た。朝からやっているのにまったく終わらない。派遣会社から、残業代はつけられないと言われているから、完全なるサービス残業だ。けれど私は意地になって、終わるまで帰るもんかと思っていた。

すると、久保さんがふらっとフロアから出ていった。

「またコーヒーか」

どうでもいいけど。霞(かす)む目をこすりながら、パソコンに向かい続けていた。

十分ほどして、ビニールがこすれるようなガサガサという音がうしろで聞こえた。振り向くと、久保さんがコンビニ袋を持って入ってきた。

「弁当買ってきた。食う？」

私の前にビニール袋をドサッと置いた。中には、どんな好みでもＯＫなように、おにぎりとサンドイッチ、それに幕の内弁当まで入っていた。

「でも……」

私が遠慮していると、かまわず彼は袋から品物を出す。

「もう八時だし。桐原さん、それ終わるまで帰らない気でしょ？」

私の気持ちはお見通し、とでもいうような言葉をかけてくる。

「好きなの食べていいよ。俺はこのおにぎりとお茶をもらうよ」

彼はしゃけおにぎりとペットボトルのお茶を手にとった。頑(かたく)なに断るのも不自然だから、机の上に手をのばす。

「……じゃあ、いただきます」

遠慮なく、一番食べたいと思った幕の内弁当を手にとった。途端、久保さんが笑顔になった。彼の笑った顔を見たのはこれが初めてで、びっくりした。

「それ選ぶと思ったよ。昼にうどんしか食べてなかっただろ？　腹が空いてるだろうなと思ったから、弁当も混ぜてみたんだ」

私が幕の内弁当を選んだのが面白かったらしい。普段は仕事一筋で、冷徹で、能面の久保さんが、久しぶりに普通の人間に見えた。

しばらく笑っていた彼が、ふいに私を見つめている。

「……悪かった」

「は？」

突然の彼の言葉にびっくりする。

「この前、書類の不備を指摘したとき。桐原さんを侮辱(ぶじょく)するみたいなことを言って……ごめん。行き過ぎた道は戻ればいいけど、言葉の言い過ぎはとり返せない。ひどいこと言った」

悲しげな顔でつぶやく。

「職場では冷徹な人間に徹するつもりでやってきた。実際、仕事の鬼って感じだと思うし、この姿勢を崩すつもりないけど、この前のことは謝らないとって思ってた」

仕事の仮面をはずした久保さんは、とても優しい顔をしていた。

「もういいんです……ミスした私が悪いんですし」

つい、彼から目線をそらしてしまった。じっと見られてるのが、恥ずかしい。

「いや、ひどかった。仕事とは関係ないことを言った」
そう言った彼は、本当に落ち込んでいるようだ。
今まではなんだか、孤高の狼みたいに高いところから睨んでるだけだったのに、急に同じ目線におりてきた感じがする。だから私も、自然に優しい気持ちになってくる。
「まあ、図星でしたから、余計腹が立ったんです。私、小さい頃からこんな性格なんですよ。アイスとチョコレートどちらか選んでいいよって言われて、迷ってるうちに両方溶けちゃう……みたいな。そんな性格なんですよ。優柔不断なんです」
自嘲ぎみにそう言った私を見て、久保さんは首を横に振って否定してくれる。
「でも、私を生んでくれた両親と、かわいがってくれたおばあちゃんは、この性格が長所だって言ってくれました。仕事はがんばります。でも、性格を劇的に変えるっていうのは……難しいかもしれません」
ここまで言ったところで、彼は我慢できないといった様子で口をはさんだ。
「性格は関係ない。桐原さんはよくやってくれてる……わかってるよ」
急に優しくなった久保さんを前にして、涙腺が思わず緩む。まだ開けていない幕の内弁当のプラスチックの蓋の上に、雫がこぼれる。
「ごめん、ちょっと困らせてやれっていう軽い気持ちで言ったんだ。好きな子を困らせたいなんて、子供みたいだよな」
優しいトーンで久保さんはそう言って、私の頭にフッと手をのせた。びっくりして、私は彼を見

上げる。
冷徹なはずの久保さんの目に、ほんのり温かいものが宿っていた。
「職場恋愛なんて、面倒くさいと思ってただけど、君のこと……好きかもしれない」
信じられない言葉を、彼は口にした。
彼が、私を……好き？
信じられない。
でも彼の目は本気だ。なにか答えないと！
「私も……好きです。久保さんに恋人がいても関係ないって思うくらい、好きです。私のことなんか、眼中にないと思ってました」
懸命にそれだけ口にした。すると、彼は頭に置いていた手を離し、すっと頬に触れる。
「俺が仕事に関しては男も女も関係なく厳しいのも、桐原さんなら受け入れてくれる気がしてさ」
仕事のときの、鋭い光が目の奥に見えた。
「はい。そんな厳しい姿勢で仕事をしている久保さんだから、好きになったんです。怒られるのはつらいけど、それも……仕事と真剣に向き合っているからだとわかっています。久保さんを少しでもサポートできるよう、がんばっているつもりです」
久保さんは、黙って私の話を聞いてくれていた。きっと、彼は自分のことだけじゃなくて、この先、何十年……何百年先の未来を思って、仕事にとり組んでいる。そんな彼を、私は好きになった。
「ありがとう……わかってくれてて。随分きつく当たって、ごめんな」

久保さんが私を抱きしめる。
パリッとノリのきいたシャツの感触。清潔な洗濯物の香りがした。
職場恋愛はしたくない、なんて思っていた人が……こんな場所で、私を抱きしめていていいんだろうか。
そんな余計な心配をしながらも、私は彼の背中に手をまわした。
「今日、久保さんの誕生日ですよね。……おめでとうございます」
一度は無視しようと決めていた彼の誕生日を、私は忘れることができなかった。
「そうだっけ。自分の誕生日すら忘れてたよ」
「そうですよね……久保さんは職場では仕事のこと以外考えていないから。自分の誕生日なんか覚えてないですよね」
クスッと笑って、真近にある彼の顔を見上げた。
「でも……私は覚えてますよ。あなたが仕事しか見えなくて、見落としそうなものがあったら、私が気づいて教えてあげますよ」
「……」
久保さんは黙ったまま、私を抱きしめる腕にさらに力を込めた。
「ごめんな。俺、本当に……」
言葉に詰まって、声にならないみたいだった。
「今、すごく幸せです……だって私、あなたのことが本当に好きだから……」

そう言い終わらないうちに、彼の唇が私の口を塞いだ。冷たいと思っていた彼の唇は……バラの花弁みたいに柔らかくて……温かかった。
仕事しか見えてないはずの彼が、ちゃんと私を見てくれていた。いったい、いつからそんな風に思ってくれていたのか、これから聞きたいことがたくさんある。
仮面を外した彼は、優しい顔をしている。もしかすると……プライベートになると超優しい人だったりして……？
甘い期待を抱きながら、繰り返される彼のキスを目をつむって受け入れた。

2　真太郎のオンとオフ

「久保、ちょっと加減したら？」
私が彼に怒られていると、見かねた飛田課長が珍しくとめに入ってくれた。百部作らないといけない会議用の資料を逆さに印刷してしまって、急いで刷り直していた。
久保さんには見つからないようにコソコソ作業していたのに、思いっきりばれていて怒られた。
「さっき見たら、バインダーに閉じてって言った資料のインデックスもめちゃくちゃだった。あいうえお順にしてって言ったよね。なにあれ……」
最初に声をかけられたのは、別件での注意だった。

「あ、日にち順にしたほうが、会議の順番に見られるからいいかと思ったんですけど」
私だったら、そのほうが見やすいと思ってそうした。
「また余計なこと……。言った通りにやって。自分で判断する前に了解とってくれない？」
氷みたいな言葉がどんどん頭にふってくる。背中を丸くして縮こまっていると、今度はコピー機のほうを目ざとく見つけられた。
「ちょっと、それさっきもコピーしてなかった？」
彼の語気が強くなる。
「あ、えっと……それが、コピーの順番逆さまにしちゃって」
「え、何枚？」
「……あっという間に百枚無駄になりました」
ウソついても仕方ないから、本当のことを言った。
「なにやってんの⁉　まじで、どういうつもり？　あれほどコピーする前には確認してって言ったよね⁉」
「はい……」
ここで課長の援護が入った、というわけ。いつもは無関心を装ってる課長だけど、私に対する久保さんの厳しさに、今日はたまりかねたみたい。
昨日あんなに優しかったのに、一晩明けて……また鬼に戻った。仕事のスタイルを変える気はないって言ったけど、本当に勤務中の私は彼の奴隷のようだ。昨日、この人と抱き合ってキスしたのは現実だったのかな？
ふと不安になった。あれって……妄想じゃないよね？　仕事に疲れて自分に都合のいい妄想をしていたって可能性も否定できない。
「課長、桐原さんは一応僕のヘルプってことでつけてもらってるんで、好きにさせてください。それに、理不尽なことでは注意してませんよ」
課長に対しても、まったく怯まない。
「あ、そう。まあ……とにかく、彼女は女の子なんだしさ……」
「仕事に男も女もないですよ。僕は別の会議に出ないといけないんで、失礼します」
そう言って、久保さんは課長に一応軽く頭を下げてフロアを出て行った。私と課長は彼が出ていくのを、息をとめて見ていた。
彼の姿が見えなくなったのを確認して、ふたりとも同時にため息を漏らす。
「君も大変だね。大丈夫？　あの……辞められると、困るんだけど」
課長が心配そうに私を見た。
「あ、大丈夫です。私が悪いんですし」
なるべく笑顔を作って、課長に心配をかけないよう答えた。髪は薄いけど、まだ四十歳前後の若い課長。
久保さんと違って、気遣いのできる優しい人だ。少し気の弱いところもあって、ストレスで軽い胃潰瘍になったこともある。

それに比べたら、久保さんは槍(やり)で心臓を突いてもびくともしないんじゃないかと思うくらい強い。心臓に毛でも生えてる？　でも、昨日告白してくれたときの彼は、なんだか参っているようだった。本当は色々と悩みを抱えているのかもしれない。

明日は彼とデートをしようって約束している。

クリスマスイブは仕事で遅いから、二十五日に会おうって言われた。でも、今の態度を見ていると、それすら妄想だった気がして不安になる。

手帳をこっそり開く。ちゃんと花丸が書いてあって「久保さんとデート！」ってなっている。

多分、夢じゃない。

なんとか自信をとり戻して仕事を再開する。大量の失敗したコピー用紙は、私が全部責任を持って裏紙として活用することで許してもらった。

「お先に失礼します」

仕事がひと段落して、定時の五時に帰宅する。〝仕事場の鬼〟モードの彼の隣にいるのは、やっぱり疲れるなあ。

「おつかれさーん」

課長ほか、ふたりの社員が答えてくれる。久保さんは、うしろを向いてパソコンを見たまま軽く左手を上げた。彼なりの「おつかれさま」の合図らしい。

明日、本当に待ち合わせ時間に来てくれるのかな。真剣に不安になった。……ふたりきりのときも、あんな感じだったらどうしよう。

「ご飯こぼさないで食べられないの？」とか冷やかに言われたりして。

疲れるよ。やだよ。休日くらい、昨日の夜みたいに優しくしてほしい。

私は明日のためにと、新しい洋服を一式買いに出かけた。

いつもはファッション性よりも機能性を重視して洋服を購入していたから、かわいいスカートなんて持っていない。

「お客様は、ワンピースがお似合いになりそうですね。これにカーディガンを合わせたらどうでしょう」

お店の人に言われるまま、キレイなオレンジ色でマーブル柄のワンピースと、オフホワイトのカーディガンを試着した。これだと、茶色のブーツが合いそうだ。そう思って、奮発してブーツも買ってしまった。

デート一回のために、四万も使ってしまった。私にしたら、あり得ない贅沢だ。百四十円のポッキーを買うのが毎日の楽しみの私は、このお金でポッキーが何箱買えたか……と、バカなことを考えてしまう。

でも一生無理だと思っていた久保さんとのデートが叶(かな)うんだから、四万円くらいどうってことない。

その日の夜、しつこいぐらい顔をパックしたりして長風呂していたら、順番待ちをしていた弟に

怒られた。今さら、なにをやってもさほど変化はないんだけど、後悔しないように準備したかったのだ。
ベッドに入ると、今度は妄想が広がって大変だった。昨日感じた唇の感触を思い出して、体が熱くなる。
明日も、キスをしてくれるのかな。本当に、私のことを好きでいてくれてるのかな。
こんなに興奮した夜だったけれど、なんとか五時間ほど眠って、私は十時の待ち合わせよりも一時間も早く待ち合わせ場所に到着した。
出がけに、お洒落をしている私を見て、母がなんだかにやにやしていたのを思い出す。
「どうしたの？　彼でもできたの？」
「違うよ。たまにはこういう格好もしたいと思っただけ！」
照れを隠すように、慌てて家を出た。
マフラーなしで外に出たら、木枯らしが予想以上に冷たかった。でも、このコーディネイトに合うマフラーなんて持ってないから仕方ない。
早く着きすぎたから、駅前の喫茶店でお茶を飲むことにした。何回も時計を確認したけれど、五分くらいずつしか進まない。
長い……。そう思って、待ち合わせの改札を眺めていたら、黒のジャケットを着た久保さんが改札を通るのが見えた。
本当に来てくれた。しかも、三十分前に。

久保さんが予定より早めに駅に着いたのを見て、それだけで私はドキドキした。
私が喫茶店でお茶を飲んでるなんて知らないから、彼はそのまま改札の柱にもたれかかって文庫本を読み始めた。あそこで、三十分待つ気だ。私は慌てて外に出た。
「久保さん」
私が声をかけると、彼はふいっと顔をあげた。
「あれ、早いね。どうしたの」
私が改札の外から現れたから、ちょっと驚いている。
「いや、ちょっと早く着いてしまって……先にひとりでお茶していました」
少し声が震えた。寒いのもあったけど、プライベートの久保さんを見て、心臓が破裂寸前だった。スーツ姿じゃない姿を見ただけで、興奮する。
「俺も早く着いちゃったよ。まだ美術館開いてないよね……公園でも散歩する？」
今日は美術館を見ようって約束していたんだけど、まだ開館まで時間がある。
「はい！」
私は彼と一緒ならどこでもいいと思っていたから、嬉々として隣に立った。
しばらく無言で公園を歩いた。
（やっぱり、プライベートでも無口なんだな）
そう思ったけど、会社でのトゲトゲしさはなかったから、安心して隣を歩いていた。

「寒そうだね」
いきなりそう声をかけられ、ふわっと首にマフラーを巻かれる。彼の巻いていたグレーのマフラーだ。
「え……いいですよ」
「胸元開いてて寒そうだから。いいよ、それ使って」
そう言った久保さんの目は、告白された夜に見たときと同じ優しいものだった。
彼が私に好きだと言ってくれたのは、ウソじゃなかった。改めてそのことを思い返して、熱いものが込み上げる。
「どうしたの？」
突然涙目になった私を見て、明らかに彼は驚いていた。
「嬉しくて……久保さんが、本当に私とデートしてくれるなんて、信じられなくて」
初デート開始十五分で、私はなぜか泣き出していた。
「仕事場で素っ気ないから、不安になった？」
「はい。もしかして、私の妄想だったのかな……なんて思ってました」
そう言った私の頭を、久保さんは優しく撫でてくれた。
「悪いけど、仕事場ではあの態度で徹底するから。ただ、オフのときは違う。派遣の桐原さん、じゃなくて俺の大切な彼女って思ってる」
私が予想していた以上に、オフの久保さんは別人みたいに優しかった。

「彼女……」
その言葉を自分で口にしてから、猛烈に恥ずかしくなった。憧れて、憧れてやまなかった彼が、本当に私を彼女だと言ってくれている。
「桐原さんの名前は、芽衣だよね。そっちで呼んだほうがいいかな、それとも苗字のままのほうがいい？　俺のことは真太郎って呼んでほしい」
彼の下の名前が真太郎だということを初めて知った。私の中では、いつでも彼は「久保さん」だったから。
「真太郎」なんて、恥ずかしくて言えそうにない。
「私のことは芽衣でいいんですけど、久保さんをいきなり名前で呼ぶなんて無理ですよ！」
慌てふためいて、持っていたカバンを落としてしまった。久保さんは丁寧にそれを拾って微笑む。
「芽衣は面白いね。顔が真っ赤だよ？」
「……」
倒れそうだ。美術館なんか見てられない。即行で倒れそう。夕方まで彼の隣にいたら、息が苦しくて死にそうだ。
私がマフラーをぎっちり握って下を向いたから、久保さんは私の顔を覗き込んできた。
「どうした？　気分悪いの？」
（ある意味……具合悪いです。久保さんのせいで、心臓がとまりそうなんですよ）
心の中でそう思っていたけど、口には出せない。

「美術館、やめる？」
「え、どうするんですか？」
「んー、空気のいいところを少し歩こうか。どう？」
私は久保さんさえいればいいんだから、どこでもいいです。そう思って、コクコクと頷く。
「じゃ、行こうか」
そう言って、彼はさり気なく私の手を握った。
「！」
待って！　待って下さい!!　心臓がとまりそうな私に、その行動は……強烈すぎます！　職場でキスされたときは、パニックになっていたから受け入れられたけど、今日の私はまるっきり余裕がないんです！
緊張で手が冷たくなっていて、久保さんは手を握って驚いたようだ。
「やっぱり寒いみたいだね。手がすごく冷たい」
「いや、大丈夫です」
顔はゆでだこみたいに赤くなってるくせに、手足が冷たい。体中の血液が、全部顔に集まっちゃったみたい。
「……俺、そんなに怖い？」
私が緊張して固まっているのを見て、彼は私が自分を怖がってると思ったらしい。
「ちが……違います。緊張しているんですよ。今までちゃんと会話らしいこともしたことない久保さんと一緒にいるのが信じられなくて」
いつまで経ってもこんなことばっかり言う私に、彼も困り顔だ。
「〝鬼の久保〟を忘れてもらうまで、ちょっと時間かかるかな……」
そんなことをつぶやいて、彼は握った手に力を込めた。

ぶらぶら散歩している間に、お昼近くになっていた。
なんだか頭がボーッとする。
「ランチ、なにがいい？」
相変わらず手をつないだまま、そう聞かれた。
「すみません。なにも食べられそうにありません」
ほんの数時間一緒に過ごしただけで、緊張のしすぎで胃が痛くなっていた。軽い頭痛と、なんだか寒気までしてきた。
「大丈夫？　寒いところ歩きすぎたかな」
私の調子が悪そうなのを心配して、近くのコーヒーショップに入ってくれた。
「ホットミルクもあったから」
私にはホットミルクを差し出してくれて、自分は相変わらずエスプレッソを頼んだようだ。
「ありがとうございます」
情けない。初デートでいきなり泣いて、おまけに具合が悪くなって心配をかけている。

もっと笑顔で、楽しくデートできると思っていたのに。
毎日怒られている相手から、こんなに優しくされたのが嬉しすぎて体がついていかない。頭がぼーっとする。
「寒いせいかと思ったけど、本当に顔がずっと赤いよ。もしかして、熱あるんじゃない？」
ふっと彼の手が私のおでこに当てられた。体がビクッと反応してしまう。
「ちょっと熱い。具合悪いのに無理して来たの？」
「いえ、朝は平気でした」
昨日、長風呂してたのが悪かったのかな？　どうやら、彼と一緒にいる緊張とは別に、本当に風邪をひいてしまったみたい。
「無理はしないほうがいいね。今日はこれで帰ったら？」
あっけないほど簡単に、デートを切り上げて私に帰れと言う。
（そんな……そんなの嫌だ！）
「嫌……」
小声でぽそっと言ったのが聞こえなかったのか、久保さんは聞き返してきた。
「え？　なに？」
「帰るなんて嫌です！　せっかく……せっかくのデートなんですから。熱なんて、気にしないでください」
ムキになって帰るのを拒んだ。このまま別れて、月曜日にはまた素っ気ない彼にしか会えなくなるのは嫌だ。
「ダメだよ。体調悪いのに、無理したら来週の仕事にひびくよ。デートなんてまた来週すればいいんだから……」
久保さんは私の腕をつかんで駅に戻った。彼らしい、冷静な対応だ。無茶してデートを続けないのは、本当に心配してくれてるからだってわかる。
でも……寂しいよ。
改札をくぐったところで、ついに涙をこらえきれなくなった。
（こんな大事な日に、なんで風邪ひくのよ、私！　別に裸見せるわけじゃないんだから、あんなに長風呂する必要なかったじゃない。バカ！　バカ芽衣!!）
自分で自分を責めながら、めそめそと泣く私。
「来週、もう一回ちゃんと会おう？　電話もするから、ね？」
久保さんが耳元でささやいた。熱でボーッとしていたけど、頬にキスされたみたい。
「ひとりで帰れる？」
「はい、すみません。今日はこんなんで……」
「気にしないで。今日で終わりなわけじゃないんだから。まだ始まったばっかりでしょ。じゃあ、家についたら電話くれる？　ちゃんと着いたかどうか気になるから」
彼は私が乗り込んだ電車のに向けて手を振った。
電車に揺られながら、今日、久保さんに聞きたいと思っていたことをひとつも聞けなかったのを

思い出して、激しく落ち込んだ。
私のどこが好きなのかとか、いつぐらいから思っていてくれてたのかとか。聞きたいことはたくさんあったのに。初デートはうんと素敵なものにするんだって意気込んでいたのに。
それに、今日は暗くなるまで一緒にいたいと思っていた。
キスだって、たくさんしたいと思っていた。
告白してくれたときに受けた、久保さんの〝バラのキス〟……今日は軽く頬にしかしてもらえなかった。あの喜びを得るには、また一週間〝鬼の久保〟に耐えないといけない。
ほんの数時間の散歩で、前よりもっと彼を好きになっている自分を自覚した。
優しかった。彼は仕事を離れると、とても優しい人だった。
寒そうだねってマフラーをかけてくれた。具合の悪い私を心配して、全然デートらしいこともできなかったのに、私の体調を優先して考えてくれた。
職場で、今までみたいに他人のふりをされて、平然としていられる自信がない。公私混同を彼は嫌うだろうけれど、この気持ちを抑えるのは……大変だ。

家に帰って熱を測ったら、三十八度近くあった。
久保さんの判断は正解だった。あのまま無理にデートしても、途中で倒れていたかもしれない。無事に帰宅したことを電話で報告する。
「大丈夫だった？」

「はい。すみませんでした。あのとき強引に帰してもらわなかったら、大変なことになるところでした」
「明日も休みだから、十分寝て。月曜日はちゃんと来いよ？」
「……はい」
がっくりとうなだれながら、私は携帯を切った。
薬を飲んで、軽く食事をとり、たっぷりの紅茶を飲んでからベッドにもぐる。今日一日の自分のダメっぷりに、涙がとまらない。
がっかりされなかったかな。来週、本当にまたデートしてくれるのかな。
つくづく恋愛に慣れていない自分を痛感する。初デートで気合を入れすぎた私の気持ちが、今日のデートでは空まわりした。
「真太郎……」
彼の名前を口にしてみる。熱がまた上がった気がした。
好き……好きすぎて、おかしくなりそう。もっとあなたに触れていたかった。手をつないでいたかった。
彼に握られていた左手にキスをした。
どうか、これっきりじゃありませんように。また、彼と手をつなげますように。
そんな後悔と反省と希望を抱きながら、土日をかけて風邪を治した。

3　意外な顔

約束どおり、月曜日は元気に出社した。せきは出るけど、もう熱はないし元気だ。
「おはよう」
「あ、おはようございます」
仕事モードの久保さんと挨拶を交わす。このギャップはどうにもならないようだ。
昨日の電話で、体調がよくなってきていることを伝えていたから、彼はとくに「どう？」とも聞いてこない。この態度なら、外でのデートを見られない限り、社内で私達が付き合っているのがバレることはなさそうだ。

お昼休憩の時間になり、社員食堂で今日はハンバーグを食べていた。
いつもは同じ部署の男性社員三人と一緒なんだけど、今日はみんな仕事が忙しそうだったから、ひとりで食べることにした。
「……ここ、いい？」
唐突に声をかけられる。
見上げると、そこに立っていたのは隣のグループの三島さんだった。久保さんと同期で、彼も隣のグループでは実力を発揮しているそうだ。
ただ、久保さんとはまったく違うタイプで、根っからの女好きという噂を聞いていた。隙さえあれば、すぐに女性に声をかけて、恋人も大勢いるらしい。
「あ……はい」
なんでいきなり私に声をかけたのかわからないけど、断る理由もないから頷いた。
三島さんは、カレーとサラダのとり合わせだ。
「ここの食堂でなんとか食べられるメニューって、そのハンバーグとカレーぐらいだよね」
ため息まじりに、彼は一口コップの水を飲んだ。
「そうですね……」
仕事で時々資料を届けるくらいしか面識がないのに、いきなり話しかけられても返事に困る。
「桐原さん、いっつもあの男グループで食べてるから、声かけられなかったよ。今日はなんでひとりなの？」
あっけらかんとした調子で、そんなことを言ってくる。
「皆さんまだ仕事が残ってるみたいです」
「ところでさ、久保って相変わらずスパルタなんでしょ？　よくあいつの下で仕事続けられるね。うちのグループに異動させてもらおうか？」
冗談でもない調子で、そんなことを言ってくる。
「いえ、大丈夫ですよ。仕事をきちんとやっていれば怒る人じゃないですから」

久保さんを擁護するようなことを言ったからか、三島さんは探るような目つきをした。
「ふーん。あいつ、あんな感じで冷たいのに、夢中になる女が結構いるからな。君もそのひとり？」
随分不躾なことを聞いてくる。ちょっと腹が立ったから、その質問にはまともに答えなかった。
不本意ながら三島さんとご飯を食べていると、私達の横を久保さんが通り過ぎた。仕事が終わって、食堂に来たみたいだ。私と三島さんを無視して、奥の席に座ってひとりで食事を始めた。
もしかして、この状態って誤解されてる？　久保さんが通ったとき、ちょうど三島さんが私のほうに身を乗り出して話しかけてきていた。
急に不安になる。
（セクハラな三島さんなんか、なんとも思ってないですよ？　誤解しないでくださいね？）
そう思いながら食事を終えると、さっさと席を立った。
「桐原さん、また声かけるね」
私が立ち上がった瞬間、うしろで三島さんが言った。
軽い。久保さんに比べたら、彼は布っきれみたいに軽い。
「機会がありましたら……」
それだけ答えて、足早にフロアへ戻った。ほかの人も食事に出たみたいで、そこには誰もいない。
ため息が出る。久保さん、なんで声をかけてくれなかったのかな。別に、三島さんがいたって、一緒に食べてもよかったのに。ていうか、一緒にいて欲しかった。
そんなことを考えていると、こちらへやってくる足音がした。

久保さんが戻って来たようだ。
私のほうからは、なんだか声をかけづらい。誰もいないんだから、ちょっとくらいプライベートなことを話してもいい気がするのに。
やっぱり彼はなにも言わない。たとえ周りに人がいなくても、オフの顔は会社では見せないと徹底しているんだろう。
「さっき、三島となに話してたの？」って聞いてくれれば、相手が勝手に隣に座ってきたいきさつを話せたのに。パソコン画面を眺めて、なにやらメールに返信しているみたいだった。
やっぱり会社での彼は、相変わらず怖い。土曜日に借りたマフラーを返そうと思って持ってきたけど、渡せそうにない。
「桐原さん」
昨日は「芽衣」って呼んでくれた彼が、私を苗字で呼んだ。
「はい」
「昼休み終わってからでいいから、ちょっと下の倉庫からこの資料出してきてくれる？」
細かく資料の名前がメモしてある紙を渡される。
「はい。わかりました」
彼は職場では、私を好きなことすら忘れてるのかもしれない。軽く落ち込む……
始業ベルが鳴り、私はすごすごと倉庫に向かった。少しカビくさいこの部屋は、めったに人が入

らないから、空気がよどんでいる。マスクしないと、ホコリを吸いそう。
ブツブツ文句を言いつつ、指定された資料を探す。
「えっと、これと、これと……」
分厚いバインダーに入った資料を三冊も持つと腕が折れそうだ。それを、さっとうしろで受けとってくれた人がいた。
「え？」
びっくりして振り返ると、久保さんが立っていた。背が高い彼は、私が踏み台に立っても目線を上げないと顔を見られない。
「あの……資料の追加かなにかをお探しですか？」
ビクビクしながらの質問。
「……」
彼は無言でしばらく私の顔を見ていた。それからちょっと顔を傾けて、私の唇に自分の唇を重ねた。バラの……〝バラのキス〟。
「……」
驚きのあまり声を出せないでいる私を置いて、そのまま久保さんは三冊の資料を手にして出て行ってしまった。
なに……今の。彼なりのやきもちだったんだろうか。言葉にできない思いを、キスで表してくれたんだろうか。よくわからないけど、素直に嬉しい。

私は今触れた彼の唇の感触を確かめるように、自分の唇を指でなぞった。
その週は、結局このキス事件以外、彼との接触はなく、久保さんの奴隷のように働いた。
周りの社員からも、私に同情する声が聞こえるくらい、久保さんにしごかれた。久保さん、あなたは二重人格ですか？　それとも……「S」ですか？
どうにか耐えた五日間。
待ちに待った週末、金曜にメールが来て「先週と同じ駅前に十時ね」と再びデートのお誘いがあった。
平日は結局、一度も電話していない。怖くて電話なんかかけられなかった。
そして当日。先週と同じ服装で、私は再度デートに挑んだ。まさに「挑む」っていう気持ち。先週のような失態は見せたくない。それに、一週間職場でしごかれたお陰で、恋人同士という甘い気持ちも薄れていて、〝鬼の久保〟モードで冷たい態度をとられるんじゃないかと身構えていた。
「今日は時間通りだね」
この前と同じく早めに来ていたらしい久保さんは、また文庫本を読んでいた。
「今日は、風邪もひいてないですし、大丈夫です」
私が仁王立ちしてそう宣言するのを見て、彼は笑った。
「なんでそんな怖い顔してんの？」

（誰のせいだと思ってるんですか⁉　あなたに一週間しごかれたせいですよ⁉）
彼は本を閉じながら言う。
「じゃあ、今日は俺のアパートにでも来る？」
「は？」
あっさりすごいことを言われて面食らう。
「寒いだろ、どこ行っても」
まったく予期しない言葉だった。久保さんは、ひとり暮らしなんだろうか。自宅通勤かと思っていたけど、私を誘ってくれるってことは、やっぱりひとり暮らし？
よく考えてみると、彼のプライベートについてなにも知らない。……謎の男、久保真太郎。
言われるままついて行くと、そこは家族で住んでもよさそうなほど広いアパートだった。部屋数が三つもあって、どの部屋も本であふれている。どうやら彼は本が好きらしい。
「その辺に座って」
「はあ……」
職場にいるときの緊張がとれなくて、私は固まったままソファにぎこちなく腰を下ろす。久保さんは温かいコーヒーを淹（い）れてくれて、テーブルにそれを置くと、私の隣に座った。
なにか言うと怒られそうな気がして口が開けない。
「怖いの？」

私の体をそっと抱き寄せて、久保さんは髪にキスをした。
「だって、昨日までの久保さん、いつもよりもっと冷たかったから……」
たまらなくなって、彼の腕の中で弱音を漏らす。
「ごめん。なんでもないふりをしようと意識してたら、余計に厳しくなった」
彼が私を強く抱きしめた。
「あと、三島とはもう親しくするなよ？　あいつ、相手かまわずだからな」
……やきもち？
「だからって、あんなに冷たくするなんてひどいよ」
可愛いやきもちなんてレベルじゃない。久保さんのはもっともっと強烈だ。本人はそれほど自覚してないみたいだけど、冷たくされるほうはたまらない。
むくれながら下を向いていると、いきなり両手で顔を引き上げられる。
「誰にも渡さない。俺だけの芽衣なんだから。三島なんか、絶対ダメだ」
「ん！」
ほんのりエスプレッソの香りのする部屋の中で、私の唇を強引に奪う。普段は冷静な彼のキスが……こんなに熱いことに驚かされる。
「んん……久保さん、急に……こんなの」
焦（あせ）って彼から離れようとしているのにびくともしない。
「真太郎って、名前で呼んで」

切ない声で耳元にささやかれる。
「私なんかの……どこがいいんですか」
名前を呼ぶのがやっぱり恥ずかしくて、やっとの思いでそれだけ言った。
「全部。頭の先からつま先まで全部好きだよ。このオレンジのワンピースも可愛いけど、芽衣は、どんな格好してたって可愛いよ。すべてが愛おしいと思ってる。多分、芽衣が俺を好きになる随分前から……俺は君に惹かれていた」
こんなに強く彼に思われていたなんて、信じられない。
「優柔不断な性格って言われたから、嫌われてるんだと思ってた」
まだ信じきれなくて、済んだ話をむし返してしまった。でも、まったく怒ったりしないで、逆に恥ずかしそうな顔で答えてくれる。
「あれは、そういう性格の芽衣が気になるってことだったんだよ。不安定で目が離せない。……本当に愛しくて」
「……」
私のどのあたりを好いてくれたのかはわからないけど、本気で私を好きだと言ってくれているのがわかって胸が熱くなる。
「私だって、結構前から好きでしたよ？　絶対叶わないって思って、毎日泣きたいくらいつらかった。今だって、これが夢だったらどうしようって思ってる……」
「夢じゃないよ。この感覚が夢だと思う？」

強引に私の口の中に侵入してきた。
恋愛経験が浅い私には、初級・中級を飛ばして、いきなり上級テクニックで迫られているようなキスだった。
頭がショートして、彼のなすがままになる。顔のいたるところにキスされて、何度も舌を絡めとられた。
「ん、んん……」
「芽衣……好きだよ……」
キスの合間にささやかれる甘い言葉。夢にまで見た彼からの愛のささやき。
新調したワンピースを優しく脱がされて、あっという間に下着姿にされた。まさかと思ったけど、一応かわいい下着をつけておいてよかった。
「明るいね……カーテン閉めようか」
遮光の効いたカーテンを閉められて、部屋が急に暗くなった。その薄暗がりの中で、真太郎は自分も上半身裸になって私の体にそっと触れてきた。体が震えてしまって、未経験なのはごまかしようがない。
「大丈夫……なにもしないよ」
下着には手をかけず、私のことを優しく抱きしめてくれた。彼の肌の温もりで、しだいに震えがとまる。
「キスは、平気？」

私が落ち着いたのを確認して、そう聞いてきた。
「ん……」
涙目になりながら頷くと、またキスが繰り返された。

私のペースに合わせて、真太郎は本当にキスしかしなかった。でもキスはすごく情熱的で、ちょっと予想外だった。おまけに、ちょっと別の男性と話しただけでやきもちを妬くみたい。いつもクールで冷酷だと思っていた鬼の久保真太郎は、ここにはいなかった。こんなにギャップがあるのを、よく隠せるものだなあと、感心する。
私の思いのほうがずっとずっと強いと思っていたけれど、今はどっちが上かなんてわからなくなった。

「……コーヒーが冷めちゃった」
熱いキスを交わした私達は、やわらかい毛布に包まって、冷めたコーヒーを眺めていた。
「これ、バニラアイスと合わせるとうまいって知ってる？」
「アッフォガート！　私の大好物ですよ」
嬉しくなって彼を見上げた。
「じゃあ、後でバニラアイスを買ってこようか」
優しく真太郎が微笑む。

「うん！　私、バニラアイスが一番好き」
自然に甘えた声になった。徐々に敬語もとれてきている。キスで緊張がほぐれて、真太郎の温かさを再確認できたからかもしれない。
「バニラが一番？　一番は俺だろ？」
彼はまた私にキスを求める。もう逃れようがないというほどキスされた。
真太郎は、バニラアイスをとろとろに溶かす、熱いエスプレッソのよう。私がまだお子様だから、これでも手加減してくれているに違いない。本気の彼はどんなのか、鬼の彼を考えるより怖い……
仕事へ向かう姿勢から考えると、この人は心に決めたことには猛進するタイプなのかもしれない。その情熱が、思いもかけず私に注がれている。幸せだけど、ちょっとこの先を思うと尻込みしてしまう。
服を着てから、私達は手をつないでバニラアイスを買いに歩いた。
「この間借りたマフラー、返そうと思ったんだけど、真太郎の香りがするから、もう少し私が持っていてもいい？　枕元に置いてあるの。あなたが側で寝てくれてる気がして」
歩く道すがら、思い出して尋ねた。
「いいよ、俺はいつでも芽衣の隣にいるけどね」
「……」
反則。こんなに優しいなんて……ずるい。来週から会社に行きたくなくなってきた。こんな彼は週末しか見られず、来週もまたいじめられるのかな。

まだ甘ちゃんなバニラアイスの私を溶かすエスプレッソ。火傷（やけど）するほどじゃなくて、適度な温かさだといいな……なんて思った。

4　真太郎の過去

年が明け、一月の仕事を開始した。で、しょっぱなから私は体調を崩していた。お昼休みが終わる十分前。私はトイレの中にいた。

……調子にのって正月におせちを食べ過ぎたのが悪かったらしい。それでトイレにこもっていたら、女子社員が三人ほどで化粧直しをしながらしゃべる声が聞こえてきた。

「久保さん、相変わらず怖いよねー」

その言葉に、思わず体が浮きそうになった。真太郎のことになると、すぐに反応してしまう私。

「そうそう、午前中さ、コピー部数が違うって桐原さん怒られてるの見たよ。久保さん独り占めしてるから、ちょっとムカついてたけど。あれだけいじめられてるのを見ると、笑えてくるよ」

（笑える？　ふざけたこと言ってるなあ……）

ムッとしながらも、私の聞き耳はピンと立っている。

「ほんとー。久保さんて香苗（かなえ）さんと別れて以来、浮いた話聞かないし、もう二度と恋愛する気ないんじゃない？　久保さんのほうが振られたみたいだし」

これを聞いた瞬間、私は、思わずドアを開けて三人の中に入っていきたい気分になった。香苗さん……って誰？

「南（みなみ）香苗を独り占めした男、で有名だったもんね。男性社員からもブーイング出たらしいよ。まあ、南さんぐらい美人だと私達も文句も言えなかったよねー。仕事もできるし」

「さすがの久保さんも、香苗さんにはやられちゃったって感じなんじゃない。でもさ、彼が女にメロメロになってる姿って想像つかないよね。見てみたくない？」

「見たい、見たい！　うわーなんか、すっごいやらしい感じがするー!!」

三人は異様に盛り上がっていた。まさか、うしろの個室に、今、彼と付き合っている私が入ってるなんて知りもしないだろう。三人がいなくなるまで、もう少しここで待とう。

それにしても、さっきから手の震えがとまらない。真太郎が、秘書課の南さんと付き合ってたなんて……。その事実は、私の心を見事に打ち砕いた。

そりゃあ、あれだけのいい男だから、恋愛経験がないほうが不自然だと思う。でも、よりによって相手が南さんだったなんて。

彼女は東京支社にはいないけど、本社から何度も出張で来たことがあるから顔は知っている。年齢は、多分真太郎と同じくらいだったはず。

男性社員の人気を独占していて、高嶺（たかね）の花って感じの美人。

あの、あの美しい人が真太郎の恋人だった。しかも、彼のほうが振られた。

そうか。それで私とのことを周りに知られたくないんだ。

一度失敗してるから、もう二度と社内恋愛をしようと思わなくなったんだ。でも、たまたま私といい雰囲気になって……

どう考えても、私と南さんでは月とスッポンだ。私なんて、お化粧をしてやっと見られるかなっていう感じだけど、南さんは顔もキレイで、立ち居振る舞いや言葉遣い、プロポーションもパーフェクトだ。

あの人を、真太郎はかつて愛した。私にしたみたいな〝バラのキス〟をした――

「やだ!!」

そこまで考えて、トイレの中にしゃがみ込む。

恋人の過去を知っても、ろくなことがない。謎は謎のままのほうがいい場合もある。とくに、好きな人の過去の恋愛なんて、知らないほうがいいに決まってる。

予想外の場面で、真太郎の過去を知ってしまった。

ようやく三人が去ってくれて、私はどんよりとした顔のままトイレから出た。お腹の具合が悪いこととは別に、顔が青くなっている。

「正露丸……ありましたっけ」

薬箱を探しながら、小田さんに話しかけた。

「ああ、糖衣のがあったはずだけど……どうしたの？」

小田さんが親切に薬箱を開けて小さなビンを探し出してくれた。

「ありがとうございます。ちょっと……お腹が痛くて」

「大丈夫？　顔色も悪いよ？」

「薬飲めば大丈夫です。ご心配をおかけしてすみません」

うちのめされた気持ちで、薬を飲む。

ため息をついて席に座ると、隣の真太郎がちらっと私を見た。一応ちょっとは気にかけてくれているみたいだ。

私は、それに気づかないふりをした。妄想がとまらない。頭の中では、真太郎と南さんが仲よくしているシーンが浮かんで離れないのだ。

オフになると、彼がどろどろに甘くなるのを知ってしまっているから余計につらい。私にささやいたのと同じように……いや、それ以上に甘くささやいている真太郎が思い浮かぶ。

「香苗……愛してるよ」

幻聴まで聞こえてきた。

（やだ！　ふたりの甘い場面なんか想像したくない!!）

そういえば、真太郎はほかの女性社員と話すときよりも、彼女には丁寧に話していた気がする。

もしかして、まだ真太郎は南さんが好きなんじゃないか、そんな気分にすらなる。

明日は甘い休日を過ごす予定だったけど、金曜日にこんなことを知って、彼の前でちゃんと笑えるだろうか。

この日の私は、怒られても表情を変えることもなく、ロボットみたいに働いた。いつもはもっと反省する姿を見せるんだけど、今日はなにを言われても心には響いてこない。
「……どうした？」
さすがの真太郎も、私の異変に気づいたみたい。でも、今ここでありのままを話すわけにはいかないし、どうにもならない。過去にやきもちを妬くことほど不毛なことはないのに、妄想はとまらない。
「どうもしません。これ……すぐに直します」
書類を手にして、パソコンに向き直る。

ふいに電話が鳴った。本社のランプが点滅している。私は、なんの警戒心もなくその電話をとった。
「はい、Aグループです」
「本社秘書課の南です。おつかれさまです」
凛とした南さんの声が耳に届く。
「あ、南さん……おつかれさまです」
あまりのタイミングのよさに、私の声は自然と小さくなる。
「あの、久保さんお願いできますか？」
ここで「嫌です」なんてバカな選択肢を選べるはずもなく、当然真太郎にこの電話をまわさなくてはならない。

「少々お待ちください」
保留ボタンを押して、久保さんに取り次ぐ。
「秘書課の南さんからです」
「そう。はい、お電話代わりました、久保です」
当たり前だけど、あっさりと電話に出た。会話の内容も仕事のことだった。でも、私はわけのわからない嫉妬で、仕事に集中できない。
（過去にどんなことがあったって、今、真太郎が好きなのは私なのに。なにも心配することはないじゃない）
そう思ってみるけど、不安は隠しきれなくて、この日はわかりやすいほど落ち込んでいた。
「なにかあった？　具合悪かったみたいだけど、大丈夫なの？」
夜、珍しく真太郎から電話が来た。
ほら……仕事を離れると、優しいんだよね。彼は私を好きでいてくれている。わかってるのに、なんでこんなに落ち込んでるんだろう。
「真太郎……本当に私のこと好き？」
つい確認したくなって、聞いてしまった。電話の向こうで、真太郎が黙る。
（バカなこと聞いたかな）
「なんでそんなこと聞くの？」
「ちょっと心配になったの。私、別に大して美人じゃないし、頭も悪いし、どこがいいのかさっぱ

りわからない。真太郎だって、できれば美人のほうがいいでしょ？」
口をとがらせて、本当に子供じみたことを言った。こんな話、相手に悪い印象与えるだけなのに。おバカな私は、こういうことを繰り返してこれまでも恋愛が成就しなかった。
「……誰かから、なにか聞いた？」
勘が働いたようで、真太郎はそうつっこんできた。南さんからの電話をまわすときに、ちょっとうろたえてしまったから、なにかを感じたのかもしれない。
「なにも……なにも知らないよ」
知らんぷりをしようとするほど、不自然な声になる。
「悪いけど、過去のことは話す気ないから。周りからなにか聞いても、全部忘れてくれない？　今の俺は芽衣だけなんだから、それを信じてほしい」
真太郎の声には、緊張感が漂っていた。よほど触れられたくない過去らしい。余計気になるけど、これじゃあ聞けない。
「ん、わかった」
「明日、また俺のアパートに来てくれる？」
「うん」
「駅前で待ってるから」
「うん」
携帯を切って、そのままベッドに倒れた。

（うう……整形したい）
心底そう思った。もっと美人で、南さんと張り合えるくらいになれたら、少しは自信が持てたんじゃないか。聞かなきゃよかった……
一晩寝れば少しはスッキリするかと思ったけど、次の日の朝も心はどんよりしていた。覚えてないけど、夢見も悪かった気がする。
でも、真太郎に会えば気持ちが上向くかもしれない。今は妄想にとりつかれているから落ち込んでるけど、彼からの甘い言葉を聞けば元気になれるかも。
気をとり直し、私は着替えをすませて彼の最寄り駅までいそいそと向かった。
真太郎はこの日も私より先に駅にいて、待合室で本を読んでいる。私に気がついて、軽く手を上げた。私もそれに応えるように手を振りながら、小走りで彼のもとに駆け寄った。
「寒いね……。なにか温かいものでも買っていこうか」
すぐに私の左手を握って、真太郎は歩き出した。
彼の手は大きくて温かい。それだけを感じていれば、いつも通り幸せな休日を過ごせるはず。そう思っていたけれど、昨日の電話のことを一切口にしない真太郎を見て、やっぱり軽く落ち込む。
「おでんとか、いいんじゃない？」
「いいよ。じゃあ、コンビニで買おうか」
私達はおでん片手に彼のアパートへ向かった。

機嫌のいい真太郎に対して、私の心は嫉妬と不安でいっぱいになっている。
「ねえ、どうして私なんか好きになったの？」
またもや不毛な質問をしてしまう。昨日から、こんなことばかり聞く私に、真太郎もなにか察したらしい。
「芽衣。なんか、とんでもない誤解してるんじゃないの」
呆れ顔の真太郎。でも、私の嫉妬はとまらない。
「誤解？　南さんと付き合ってたのは事実だよね。誤解じゃないと思う」
南さんのことを口にした途端、真太郎の顔色が変わった。
「……言うなって言ったよな。そのことは、忘れろって言ったはずだ」
「……」
怖い。仕事のときと同じ〝鬼の久保〟だ。
「そんなに触れられたくないの？　まだ南さんを好きなの!?」
それでも、私はとまらない。言うべきじゃなかったのに、真太郎を問い詰めるようなことをしてしまった。彼の顔から表情がなくなる。
「今はなにも語りたくない。芽衣が、俺を信用できないっていうなら……もうこれ以上付き合いを続けるのは無理だよ」
いきなりの……別れ話。付き合ってまだ一ヶ月しか経っていないのに、こんなあっさりと。
悲しいはずなのに、その言葉を聞いた瞬間、私の心の中にわき上がったのは猛烈な怒りだった。

「信用できるほどのものが、どれくらい私達の間にあるっていうの？　私は仕事に夢中なあなたしか知らない。オフになると優しくなる、本が好き、エスプレッソが好き……それぐらいしか知らない。過去の女性のことを考えて落ち込むのは確かに無意味かもしれない。でも、それでも気にかかる私の心を無視して、そんな冷たいこと言わなくてもいいじゃない！」
私が涙目で訴えているのに、真太郎は冷たい顔のまま、なにも言わない。
南さんを話題に出されたぐらいで別れ話をするほど、今でも彼女を思っているんだ。そう思ったら、自分が情けないピエロに見えてきた。
私は真太郎にとってなに？　ペットかマスコットなの？　都合のいいときだけ優しくして、気分が悪かったら放ったらかしにするの？
「帰る……。さようなら」
そう言い残して、彼のアパートを出た。

こんなはずじゃなかった。一緒にコーヒーを飲んで、キスをして、楽しく過ごそうと思っていたのに。最悪の結果になった。
「はぁ」
吐く息が白い。冬も本番だ。
（もう終わりか。あっけなかったなぁ……）
空を見上げると、今にも雪が降りそうだった。けれど私の心はもっと寒いから、雪が降ろうと関

係ない。
会社で厳しくされるのはいいけど、オフの日にまで苦しめられるのは我慢できない。
一緒にいてもつらいだけなら、解放されたい。会社にももう行きたくない。
真太郎は南さんのことで、こんな風に苦しんでいたから、社内恋愛を避けていたのではないか。じゃあなんで、なんで私に声なんかかけたのよ。こんなにあっさり別れるぐらいなら、最初から優しい言葉なんかいらなかった！
嫌い……大嫌い。
頭の上に、雪がちらちらと落ちてくる。空から凍った私の涙が降ってきているような気がした。

「あら、早かったわね。デートだったんじゃないの？」
雪でぐしゃぐしゃになった私を見て、母がのんきに話しかけてきた。
「ほっといて！」
泣き顔を見られないよう、ダッシュで自分の部屋に入る。
濡れたコートを脱ぎ捨てて、その場に泣き崩れた。のんきに雑誌をめくりながら真太郎に憧(あこが)れていた頃の自分を思い出す。あの頃は寂しかったけど、今ほどつらくなかった。
片思いの恋が実ると、今度は別の苦しみが待っていることを忘れていた。
この日は死んだように眠った。体が冷え切っていたのに、お風呂にも入らないで、髪も濡れたままで、日曜の昼まで寝続けた。

そのせいか、次の日起きたら頭が割れるように痛かった。お酒も飲んでないのに、二日酔いみたいな気分の悪さ。
真太郎と一緒にいたら、こんな毎日が続くのかもしれない。そのうち私の心も体も、壊れてしまうに違いない。
別れて正解かもね。このまま会社で顔を合わせるだけの関係に戻ったほうが楽かもしれない。
中途半端な優しさなんかいらない。彼はもう過去の人……

翌週から、私達は付き合う前の関係に戻った。ただ違うのは、私は彼に怒られてもまったく表情を変えなくなったというところだ。
もちろん、私達が付き合ってたなんて誰も知らないから、私の微妙な変化に気づく人はいない。
化粧室で一緒になる、例のおしゃべり三人組も私達のことにまったく気づいている気配はなく、いつものようにおしゃべりに没頭している。今回は私が隣で化粧直しをしているのに、かまわず真太郎の話をしていた。
「久保さんさ、ますます渋くなってるよね。二十五歳であの渋さはただならぬ過去を感じるよね」
ちょっと太り気味の女性が嬉しそうにそんなことを言う。
「やっぱさー、南さんを怪我させたからかな？　それが原因で別れたって聞いたよ？」
隣の痩(や)せた背の高い女性が、ひそひそと声を小さくして言った。
（え……？）

私は耳を疑った。
「ああ、そうだよね。その怪我が原因でギクシャクして、耐えられなくなって南さんから別れを切り出したって聞いたよ。どこを怪我したのか、まったくわからないけどね」
「それ……本当ですか？」
いきなり話に割って入ったから、三人は目を丸くしていた。私がいたことにも気づいてなかったのかもしれない。
「あ、桐原さん……いたんだ」
「あの、久保さんが南さんを怪我させたって、どういうことですか？」
私があまりに深刻な顔で尋ねるから、三人はちょっと困った顔をしている。しばらくすると、ひとりが仕方なさそうに口を開いた。
「えっとね、二年前ぐらいかなあ。付き合ってすぐだったと思うわよ。久保さんが運転していた車で事故をしたみたい。信号無視の車に当てられたみたいだから、彼のせいじゃないんだけど、助手席にいた南さんが怪我しちゃったみたいで。ちょっと、これ絶対彼に言わないでね。こんなこと人に話したなんて知られたくないから」
焦った様子で、話してくれた細身の人は私に口どめした。
「わかってます。そんなこと、口がさけても言いません」
私はそれだけ言って、ポーチの口を閉めるのも忘れて化粧室を出た。
（真太郎にそんな過去が……）

立ち読みサンプル
はここまで

ボーッと歩いていたから、前から歩いてきた真太郎に気づかなかった。ぶつかって、ポーチの中身が床に飛び散る。
「すみません！」
すぐにしゃがみ込んで、口紅やらリップクリームやらを拾い集める。彼も無言でしゃがんで、マスカラなんかを拾ってくれた。
「ありがとう……ございます」
全部拾い終えて、私はようやくそれだけ口にした。
「……」
彼はなにも言わないで、すぐにその場を去った。その後姿が、妙に切なく見える。真太郎が負った深い傷を思い、心が痛んだ。
不可抗力とはいえ、好きな人に怪我を負わせてしまった。女性の体に傷を残してしまった罪悪感は、相当なものだったに違いない。仕事をしているときは傲然としていて図太いけれど、本当は結構繊細な人だ。
だから真太郎は、今も南さんを気遣ってるんだ……。それが恋愛感情かどうか、私にはわからない。でも、きっとそれを乗り越えようと必死になっている。私を好きになることで、乗り越えようとしていたのかもしれない。
なのに私は、彼の傷をえぐるようなことをした。怒って当然だ。だから理由も言えなかったんだ。
ごめん……真太郎。謝りたい。もう一度、真太郎とちゃんと向き合いたい。